

エデュコ **educoco**

学びのチカラで 人と社会を 未来へつなぐ

No.54
2021年

佐藤 雅彦さん

東京藝術大学
大学院映像研究科 教授

巻頭インタビュー p.2



知っておきたい教育 NOW p.4

子どもたちの成長を見守る楽しさと教職への敬意

きょういく見聞録 p.6

読書推進活動「ブックリンピック」
～読書の習慣化や質の向上を目指して～

震災追悼企画 あの日から10年。東北の被災地から p.8

- ① 東日本大震災の教訓を未来につなぐ
- ② 東日本大震災から10年
～今後の教育に求められるもの～
- ③ 持続可能で「強く、しなやかな」
学校防災体制の構築に向けて
- ④ 温故創新～「大熊町で学びたい、学ばせたい」
を叶える斬新な学校づくり

Information 北から南から p.12

第18回 地球となかよしメッセージ入賞作品発表 p.14

地球となかよしゼミナール p.18

親と子どもが楽しむ美術館①
子どもたちの詩集づくりから始まった
お菓子屋さんの文化活動

Front Runner p.19

「15分でできる小さな道徳教材集」を活用しよう！

ほっとな出会い p.20

庭師 村雨 辰剛さん

「新しい教え方」 「新しい分かり方」を 追い求めて

東京藝術大学
大学院映像研究科 教授

佐藤 雅彦さん

なぜか先生の教え方に興味をもっていた変な小学生だった

小・中学生の頃は先生が教えてくれる教科の内容よりも、なぜか、その教え方に一喜一憂する変な子どもでした。例えば、書道の時間、濡れた半紙を同じ大きさのガラスに裏からペタッと貼り、それを教壇に立てて、後ろから筆で書くという特技をもっている先生がいました。なんと後ろから裏文字を書いていたのです。すると、白い紙にいきなり文字だけが現れ、まるで、今で言うモニター画面を見ているようでした。ライブ感に溢れたその素晴らしい授業に、不良も優等生も、感激しました。私にとつては、感嘆するだけでなく、無意識に教育手法としてのメディアの在り方や表現の重要性を、感じとった最初の授業でした。

逆に、中学の時、数学で関数を教える授業で、先生が黒い箱を持ってきたことがありました。僻地モデル校だったこともあり、その日は文部省の偉い方の授業参観で、先生は張り切って工作したのだと思います。そのブラックボックスの入口に2のカードをいれ、出口から4のカードを出し、次に5を入れ10のカードを出して、先生は、この黒い箱は、数を2倍にして出す箱なんですね、と言いました。その時、教室中が妙に白けてしまいました。そこには、新しい



発見などまるで無く、関数はこうやって教えるといいといった形骸化した「いい先生の教え方」が垣間見えたのでした。

本来なら、普通になら、書道の書き方や数学の関数を学ぶのが生徒のやることなのではというが、なぜか、私は、教え方ばかり気になっていました。高校生くらいになると、その傾向が増々顕著になってきました。

ある現国の試験の時、問題文が不明確に思えたので、次のように解答を書きました。「先生は多分こういう答えを求めていると思いますが、それを聞くにはこういう問題にした方がいいと思います」と自分が考えた問題文を解答用紙に書いて提出したりして戻ってきた答案を見ると、「お前にそんなことを言われたくない！」と赤字で大書してありました。立場をわきまえていない言動に、かなり怒ったのだと思います。本当に、先生には失礼な姿勢を取ってしまったていました。

でも、どの教科のときも、「自分だったらこう教えるだろう」とずっと考え続けていました。これさえやればみんながわあっと自主的に学びだす、そういう方法が必ずあるはずだと思っていたんです。

その後、東大の教育学部に進むのですが、一番やりたかったのは「手法」なんです。教育理念や教育行政ではなく、教育方法だったんですね。どんな人でも理解できる手法はないか、どういう方法なら伝えられるか、常に考えていました。当時の友人たちに言わせると、私は何かに取り憑かれたように



PROFILE

1954年静岡県生まれ。東京大学教育学部卒。電通を経て、1999年慶應義塾大学環境情報学部教授就任。2006年から現職。著書に『佐藤雅彦全仕事』（マドラ出版）『経済ってそういうことだったのか会議』（共著・日本経済新聞社）『新しい分かり方』（中央公論新社）、他にゲームソフト『I.Q.』（ソニー・コンピュータエンターテインメント）など。NHK・Eテレ『おかあさんといっしょ』の大ヒット曲『だんご3兄弟』では作詞と企画を担当。同局の人気番組『ピタゴラスイッチ』『考えるカラス』『テキシコー』では企画・監修。平成23年度芸術選奨、2014・2018年度カンヌ国際映画祭短編部門正式招待、平成25年度紫綬褒章受章。

毎日「方法、方法」と言っていたらしいです。卒論ではアニメーション手法を使って数学を教えたいと教授たちに訴えたのですが、当時アニメや漫画は軽視、いや蔑視されていたので、「あんなもので数学が教えられるか」と罵倒され、指導してもらえませんでした。私は、教育手法への憧れを断たざるを得ませんでした。

私は手法の研究に自分をかけてただけに、それができずに大学を卒業する時は無念でした。小学校から始まった教育手法への道、つまり自分の人生が、そこで断ち切られてしまいました。

見る人の想像力を必要とする表現

大学卒業後、広告代理店に入社してCMプランナーとして仕事をしていた時も、どうすれば受け手に最もよく伝わるのかばかりを追求していました。人気俳優を起用して、流行りの音楽を使えば売れるといった、記号化された足し算には頼りたくない。全く新しい表現を作るにはどうすればいいかを考えたとき、『音こそ武器』であると思に至りました。私はCMでは全て映像より先に音を作っています。サントリーの「モルツ」や「ピコー」、トヨタの「カローラII」、



湖池屋の「ボリンキー」「ドンタコス」も、音の力で心が掴まれます。

昔から大切にしているのは、受け手の中で主体的に完成する表現を作り出すことです。一方的に情報を送るのではなく、未完成的な情報を送り、それを受け手の創造力で補完してもらい完成させる。そんな新しい情報の形はどういうものか。そんなことを目標に表現を作ってきました。

最終的に自分はやっぱり、伝えるための表現方法や教育手法を作る人間だと思っています。あることを人に分かってもらおう、実は、小学校の頃から、それが楽しくてしょうがないんです。

子どもが夢中になる教材とは

NHK教育テレビの「ピタゴラスイッチ」や、教育出版の映像教材「目で見る算数」などを企画・監修していますが、子どもが自らの探究心でそこにある問題や真理を解き明かそうとしたくなるような表現をつくることを主眼として制作しています。子どもの探究心と呼応する形の表現ができた時が一番、子どもの集中力が発揮されるので。面白ければ子どもは夢中になるのかと言うとそうじゃない。エンターテインメントのそもそもの意味は「もてなし」です。退屈している子どもに賑やかした何かを与えて時間つぶしをしておもうというもので

はなく、子どもが興味をもって、自らこちらに入ってくるような表現を作っていくなくてはいいと考えています。

「目で見る算数」などの教材においては、たくさんさんの「分かるための方法」を開発しています。

studyの語源はラテン語 studios (夢中になる)

そもそも「study」の語源は「studious」というラテン語で、これは「熱中する」とか「夢中になる」という意味なんです。子どもにとって「studious」になる状態はすごく大事だと思っています。特に幼い時から小学生の間に、一度でも「studious」になる状態が生まれればいいなと思っています。それが理科の実験であつても、サッカーでも、ギターでも料理でもなんでもいいので。

子どもが夢中になるというのは、自分がこの世の中とどう関わり合いを持つべきかが分かるという意味でもあります。少なくとも「こんなに夢中になれるものがあるこの世界なら、自分は命のある限りいたい」と。世の中に対して主体的に夢中になれる経験や対象がある子は、たとえある挑戦がうまくいかなかったとしても、新たに別のものを探し出せるでしょう。

それが、本当に夢中になることを知らず中途半端に、人やモノとの記号的な関係性だけで世の中を見ようとすると、「自分はあつちこつちに知り合いがたくさんいるからこの世の中に存在してもいい」と思うことがすごく多いと思うのですが、そんなのはまやかashiで。いまは友達が多ければ多いほどいいという風潮がありますが、本当に腹を割って話せる友達が100人も200人もいるわけがない。友達というのは真に大事な存在で、単に記号的に数でそれを評価してはいけないと思うのです。

子どもたちには、自分はこれさえしてい

れば、この世の中で充実して生きて行けるなあと思うものを見つけてもらいたい。それが生業となるようにがんばってほしいと思っています。その訓練として、子どもたちに「studious」の状態を作りたいんです。

紙媒体・教室というメディアの可能性

今後、教育現場ではデジタル教科書やタブレットがどんどん主流になっていき、紙は使われない流れとなるでしょう。私は、それでも、紙媒体は今後もすごく大事だと思っています。例えば、今の美術の教科書を見ると、「最後の晩餐」の絵の上にトレーシングペーパーがかかって、自分で一点透視図法をみつけるようになっていて。やっぱり、紙ってすごくいいなあと思うんです。デジタル化が進んでいく今の時代だからこそ、あえて紙という媒体にはとても注目しています。

教室というメディアの可能性も見過ごせません。先生の生きている言葉、生きている所作に直接立ち会えるメディア、先生や友人のアイディアが生まれる瞬間に立ち会えるメディア、自分が生み出したばかりの言葉や考えを聞いてもらえるメディア、それが教室です。「今」を共有することはすごく大事だと思っています。教室はその典型的な場なのです。でも単純に昔の教室じゃなくて、私が想像するのは、教室の天井に画像認識用のカメラがあつて、先生の動きをキャプチャーし処理もできる視覚情報システムもあつたりして。数学の授業だったら、先生が空中に手で図形を描くと、それが教室のモニターにもポンと映る。先生が空中に架空としてある立体図形を回転させたり、間違ったらその場で消したりできて。先生の頭の中にある3Dを生徒たちも見るとちよつとしたことで伝わるんです。

それを考えると、小学校の書道の先生が

見せてくれた、ガラス板と半紙を使ったメディア化はやはり素晴らしいと思います。あの時、先生もまさか私があんなに教育手法に惹きつけられているとは思像しなかったと思います……。

知識は生きる力、一生の伴侶

学生時代、初めてアメリカに行った時、ナイアガラ協の公園で友人たちとはぐれてしまつて。子ども連れの親切な男性が「You friends are looking for you.」(君の友達たちが探しているよ)と教えてくれたんです。「look for」の熟語は知識としては知っていましたが、実際に喋っている場面には初めて遭遇したので、本当に使っているんだと妙に実感しました。そのとき、英語が単なる知識ではなく、生きた言葉として胸にしまつてきたのです。

自分が受けたあのときの感動が、今の子どもたちが勉強するときにもっと味わえるといいのですが。あの生き生きとした感じが、教科書や学習教材の中に取り込めるといいなと思っています。そうすれば試験のための義務的な勉強にならず、自分事として、本当の意味での知識が身につくのではないのでしょうか。

生徒は、先生が夢中になっているのを見るのが好きなんです。数学を解くのに、工具を使うのに、理科実験をするのに。普段の授業でもマニュアルに頼るのではなく、ご自身が体験したことや、新たに発見したおもしろさなど織り交ぜて、ご自分の言葉で話してあげるとすごく伝わると思うんです。

生き生きした感動とともに得た知識は、大学受験が終わったとたんに忘れるようなものではなく、生きる力として一生の伴侶になつてくれるでしょう。

子どもたちの成長を 見守る楽しさと 教職への敬意



国立教育政策研究所長
(元東京都品川区立大崎中学校長)

浅田 和伸

ポイント

- ① 校長職を通じ、子どもたちの変化や成長の過程を直接見、体感できたのが何より幸せだった。
- ② 教師の熱意や仕事ぶりはよくわかっていて、一方で授業の難しさや専門性が外の人に理解されにくいのは残念。
- ③ ICT、特別支援、日本語指導が必要な生徒への対応等は、これからの教師の「標準装備」に。

「全部は見えない」と知る

いただいた原稿のお題は「私が現場で学んだこと、お伝えしたいこと（仮題）」だが、「現場に行って初めてわかりました！」みたいなことを美しく語るのには好きでない。いきなり放り込まれた訳でなく、自分で希望し、覚悟をもち準備をして行ったので、全く予想外

ということとはほぼなかった。一方で、あんなこと、こんなこともあるかもしれないなどさまざまに想像を巡らせていたこととびつたり一致することも一度もなかった。現実はそのようなものだ。

ただ、これは学校現場の皆さん

より、文部科学省職員を含め学校以外の人が理解しておかねばならないことだが、中に入らなければ決して見えないものがある。学校だけでなく、文部科学省だってどこだって同じだけだね。

学校の場合、例えば生徒個人や家族に関わる機微な情報、校外の人間関係を含む生徒指導に関する関係者との話などは、誰が視察に来ようと、誰に聞かれようと決して出せない。それどころか、校内でもごく限られた者だけにとどめる情報もあるし、私（校長）限りで誰にも知らせなかったものもある。要するに一番難しい部分だ。

文部科学省の職員が学校等へ行

き、教職員や関係者との距離を縮め親しく話すことは重要だが、外からはどうやっても見えないものがあることは理解すべきだし、それを埋める想像力も必要だ。逆に学校の教職員も、学校以外の社会のことについては、同様に謙虚な目と想像力をもつべきだが、これは言わずもがな、かな。

この目で成長を見る幸せ

校長をしている間、休み（完全な休みは減多になかったが）でも夜中でも四六時中気が休まらなかった。大変な仕事であることは身に沁みて知っている。それでも、生徒たちのことを思うと、本当に幸せな時間だったと感じる。今とえらい違い、などと余計なことは言わないが、あ、でも書きちゃった。特に印象的だったことをいくつか挙げると、例えばこんな点だ。

○学級などの「集団」がもつ教育力。「良い集団」は相互に及ぼし合う力で個々のメンバーの力も引き上げる。「悪い集団」は逆に働く。だからこそ「良い集団」づくりがとても大事だということ。

○子どもたちは目に見えて変わる。
夏休み明けに身長がぐんと伸び
ていて驚いたこともあるが、外
形だけでなく、例えば運動会や
文化祭などの準備や練習から本
番に至るプロセスで、生徒やク
ラスの様子がみるみる変わって
いく。その成長を体感できるの
が楽しかった。

○生徒自身のことだけでなく、保
護者や家庭の状況も含め、可哀
想なほど重いものを背負わされ
ている子どもがとにかく多いか、
また深刻かも痛感した。家に帰
すのが不憫で、なるべく長い時
間、生徒を学校に留め置くよう
にしたことさえある。「おおよそ学
校は…」なんてとても一言で括
れない現実がある。

それでもやはり、子どもたちは
この世の希望だし、教育は人生を
懸ける値打ちのある、遣り甲斐の
ある仕事だと思う。私は大好きだ。

伝わりにくい授業の難しさ

教師の皆さんが（もちろん人に
よるだろうが、多くの方は）真面
目で、子どもが好きで、教育の仕
事に一所懸命だということは、間

近に見てわかっていているつもりだ。
悩んだり傷ついたりしている生徒
のために、誰に言うでもなく、遅
くまで親身に対応してくれている
姿に感激したことが何度もある。

外の人に理解されていないと感
じるのは、授業の難しさだ。単発
の講演などとは比べ物にならない
難易度なのに、それに必要な専門
性や技術が見逃されている。本『教
育は現場が命だ 文科省出身の中
学校長日誌『悠光堂』にも書いたが、
本当に授業力の高い教師の授業は、
一人一人への目配りや声掛けが行
き届いていて、それでいて軽やか
で、芸術的でさえある。教育行政
に当たる私の根幹には「教職への
敬意」がある。

一方で、私は決して優しい校長
ではなかった。生徒への言葉遣い
や服装、服務についても危ないと
感じれば繰り返し指導した。学校
からの発行物や定期試験の問題な
ども、必要な時は直してもらった。

「学年団（ごと）の持ち上がり」を
期待している教員が多いことは知
っていたが、学校全体で教育力を
落とさず、穴を作らないため、毎
年度シャッフルした。転出を希望

していない教員に異動してもらっ
たこともある。反発もあったが、
温情よりチームづくりを優先した。
こういうやり方には異論もあると
承知しているが、必要なことだっ
たという考えに揺るぎはない。

念のため断っておくと、出ても
らった教員も評価が低いからでは
ない。私のもとより他校の方が力
を活かせるかと判断したからだ。

これからの時代の標準装備

最後に、これは主に文部科学省
に戻ってから考えていることだ
が、これからの教師への期待や願
望を二つだけ書かせていただく。

一つは、授業でのICT活用、
特別支援教育や学習障害等への基
礎的な理解、日本語の指導を必要
とする子どもたちへの対応などの
基本的な知識は、担当者等特定の
人だけでなく、これからの時代の
すべての教師の「標準装備」と考
えていただきたいということ。

もう一つは、これも教師に限っ
た話ではないが、世界を狭くせず、
外の世界を知る努力を積極的にし
て欲しいということ。一部の自治
体が行っている企業研修などはと

てもよいと思うし、日本人学校や
補習授業校などで外国での勤務・
生活を体験するのもよい。

私は本省での仕事より、大学、
自治体、大使館、他省庁、中学校、
大学入試センターなどいろんなと
ころで働かせてもらって視界が広
がった。教師にも多様な経験の機
会がもっと増やせるとよいなと願
っている。

近年のOECD等の国際比較調
査でも、日本の学校教育や教師の
力量は高く評価されている。

何と言っても、本当に教育を創
造できるのは現場だけだ。遠慮せ
ず、現場からどんどん発信、発言
するべきだ。そのほうが確実に日
本の教育はよくなる。

前を向こう。



●卒業式の様子

③ 一度読んだ本は2回以上読んでも記録できない

② 各色の指定冊数をクリアすると、必ず学級担任に見せ、サインをもらいます。

⇒どんな本を読んでいるか、読書傾向や読書記録の状況を担任が確認し、選書や読み方の指導助言をします。

③ 担任のサイン後、児童自身が校長室に読書ファイルを持参します。

⇒校長が「青 たっせい！」+スタンプ押印



④ 職員室前に達成者の氏名を掲示します。

⑤ 学級全員が輪をクリアする毎に賞状「〇の輪学級全員達成賞」を授与します。



⑥ 長期休業中は「〇〇ブックリンピック」と題して、各学年、読破冊数が多い児童の1位～3位[サマーブックリンピックのみメダル]を表彰します。



「ブックリンピック」の成果とこれから

● 読書量が増え、読むジャンルが広がる

11月末現在それぞれの輪の達成率は、青83%、赤61%、黄36%、緑23%、黒13%です。昨年に比べてかなり伸びており、多読、読書習慣の定着が図れてきています。また、流山市では、「R1読書グランプリ」と称する読書冊数を市内の学校で競う取り組みがあり、本校は2年連続最優秀賞を受賞しました。

「読書の質」についてですが、偏りなくさまざまなジャンル本を読むよう、「黒の輪」を設定しています。図書担当者が「類チェックシート」を読書記録に貼るよう徹底したため、担任が読書傾向を把握



してジャンルを広げる指導がしやすくなりました。また、「ブックビンゴ」(図書委員会による9類以外の本をまぜる仕掛け)や「校長によるさまざまな類の本紹介」「図書館司書によるブックトーク」等によっても、児童の「読書の質の向上」が実現されてきています。

● 表現力向上、学力向上につながっている

「ブックリンピック」は、読書量が可視化される取り組みです。児童も保護者も職員室前の掲示に見入りながら、次の輪達成を目指して読書欲を高めています。読書習慣の定着により、国語科や学級活動の中での読書活動も盛んになってきました。ビブリオバトルには多くの学年が取り組んでいます。教師によるビブリオバトルも見せ、表現力の向上にもつながっており、毎年、熱の入った発表が繰り返されます。

また、本校の学力はこの活動の定着に従って向上してきており、現在、国語も算数もすべての領域において全国平均を上回るようになりました。特に、両教科の記述式問題における得点率が高く、多読による「読解力」「語彙力」「表現力」等の向上が、そのような結果につながったのではと捉えています。



● コロナ禍の中での本校の読書活動とこれから……

コロナ禍の中、休校期間中も児童には本を数冊与え、読書を積極的に勧めました。休日に公立図書館へ児童を連れて行く保護者もずいぶん増え、保護者の後押しも大きな力となっています。また、会話なしで食べる給食時間を生かして「お話給食(料理が出てくるお話の朗読)」も行っています。

“夢中になって読書をする子にウィルスは近づかない”と児童にはよく話します。これからもどんな状況下であっても、読書が生活の一部となり、読書が学びや生きる支えとなる児童を育てていきます。

きょういく見聞録

読書推進活動「ブックリンピック」～読書の習慣化や質の向上を目指して～

「読書の旅に出よう！ 五つの大陸を制覇」と題し、世界五大陸を表すオリンピックマークの五つの輪を読破冊数に応じてクリアしていく「ブックリンピック」。本校では、この読書推進活動を3年間継続しており、児童の読書量が増加し、読むジャンルが拡大しています。

読書の量と質の確保は、本校の校内研究(国語科)の主題『豊かな表現』に学び、「豊かな表現」ができる子の育成～読書から広がる言葉の世界～』に迫るためのアプローチ「豊かな表現のインプット」の要として最も重要視しています。

千葉県 流山市立八木南小学校 校長 佐藤 智子



読書で伸びる力とは…

本校は、全校児童 257 名、13 学級の小規模校です。流山市は、つくばエクスプレス開通による急激な人口増加のため、新設校が相次ぐ市ですが、本校は、明治7年開校の、市内で2番目に歴史の長い伝統校です。祖父母の代から八木南小に通っていた児童も多い中、人口増加の波は本校にも寄せており、数年後には急激な児童増加が見込まれています。

4年前に校長として着任した当時、伝統校、小規模校がゆえの温かくものんびりとした雰囲気があるが、表現することへの苦手意識や自己肯定感の不足等があり、学力向上、活力(児童の自己肯定感)や表現力の向上が課題だと強く認識しました。

そこで、読書量が多いほど学力が向上すること、表現力向上のためには「豊かな表現のインプット」、すなわち読書が大切なこと、この二点を重視し、学校経営の柱に「読書の習慣化、量と質の向上」を据え、研究教科を国語科としました。

このように、読書により「言葉の力・想像力・感性・表現力・考える力」の五つの力を伸ばすことができ、それが「生きる力の育成」につながります。



読書推進活動「ブックリンピック」

読書の量と質を確保するための「仕掛け」、意欲的に楽しんで読書に親しめる全校を巻き込む活動、目標をもって取り組むことができ、その足跡が刻ま

れていき、自己肯定感を高める活動を、校長として考えました。折しもオリンピック開催が迫っており、読書で世界を旅するイメージと、あの五大陸を表した五輪マークが重なり、「ブック×オリンピック」で「ブックリンピック」と活動名をつけました。

「ブックリンピック」とは次のような活動です。

1 目的

- ①読書の質と量を確保し、読書の習慣化、質の向上を目指します。
- ②一人一人の名前が掲示されることにより、読書意欲と自己肯定感を高めます。

2 活動内容

それぞれの輪の指定読書冊数をクリアすることで(青⇒赤⇒黄⇒緑⇒黒 黒だけは冊数ではなくすべての類を学年設定冊数以上読む条件)読書量(青～緑の輪)を増やし、読書の幅(黒の輪)を広げます。

★それぞれの輪の指定読書冊数

	青の輪	赤の輪	黄の輪	緑の輪	黒の輪
低学年	30	60	90	120	0類から8類の本を、指定冊以上読む
中学年	20	40	60	80	
高学年	15	30	50	70	

3 活動方法

- ①一冊読破するごとに読書記録に記入し、ファイルします。

《記録についての約束事》

- ①図鑑は2冊で1冊、図書室にある漫画(それ以外の漫画は除外)は2冊で1冊のカウント



▲読書記録

- ②以下の読み方をした本はカウントできない
 - ・ペラペラめくっただけの本(ペラペラ読書)
 - ・最後まで読まず途中でやめた本(ギブアップ読書)
 - ・絵等を見て文章を読まない本(ウォッチング読書)

東日本大震災（以下、「震災」）から10年を迎えるにあたり、改めて防災教育の在り方について考えてみたいと思います。

震災では、これまでの想定をはるかに超えた甚大な被害が発生し、多くの尊い命が失われました。震災の経験から、子どもたちになくなる状況下でも自らの命を守り抜くため、状況を適切に判断し、回避するために最善を尽くそうとする「主体的に行動する態度」

防災教育には特定の教科や時間があるわけではありません。各教科に盛り込まれている防災に関わる学習内容や、事前・事後学習を含む避難訓練などを有機的に関連付けて、教科等横断的に防災教育に取り組むことが大切です。このことを教えてくれたのは、震災を生き抜いた当時の中学3年の生徒（岩手県釜石市）です。

3月11日、彼女は学校を出た直後強く長い揺れに襲われました。その

東日本大震災の教訓を 未来につなぐ

を育成すること。そして、故郷の復興を支え、安全で安心な社会づくりに貢献できるための力を身に付ける防災教育の重要性が再認識されました。震災後、積極的に防災教育に取り組んでいる地域や学校が増えてきました。一方で、時間の経過とともに震災の記憶の風化や、学校での防災教育の取り組みの優先順位の低下が危惧されています。

とき、「プレート海溝型の地震だ。津波がくる」と直感し、避難したといいます。そう思った理由を次のように話します。「理科で地震発生のメカニズムを学習した。総合的な学習の時間に、2004年のスマトラ島沖地震津波を学び、津波を起こすプレート海溝型があることや、その揺れ方の特徴を学んだ。さらに、災害について自分で調べ、地域への防災活動で啓発資料も作

成した」「自分で学んでいたから、これはプレート海溝型だ、津波が来るかもしれない、避難しなければならない」とができた」といいます。

彼女の言葉は、子どもたちが、課題意識をもって教科等横断的に、地域と関わりながら学習することの大切さを教えてくれます。主体的な学びが主体性を育んだといえます。このことは学習指導要領改訂の趣旨に沿うものです。

各学校では、地域の災害リスクを



文部科学省総合教育政策局
安全教育調査官
森本 晋也

調べる学習や、さまざまな状況を想定し子どもが自ら安全な場所に身を寄せる訓練、近隣の学校園や地域との合同避難訓練、家庭や地域の方々と連携した防災マップづくり、中学生や高校生による地域の防災活動への参加など、多様な防災教育が行われています。これらの取り組みの中で、家庭や地域等と連携・協働する防災教育が大切です。家族や地域の方々を知っているこ

とで、子どもたちの課題意識が高まります。そして、子どもたちも自分たちがみんなのために役立っていると実感することで、自己有用感や自己肯定感の高まりにつながります。

また、家庭・地域等との連携は、防災管理においても重要です。海岸近くにある学校で津波によって校舎が被災し、学校から地域の方々とともに避難した校長先生は、地域の方からその地の災害の歴史を学び、地域とともに行った避難訓練、災害時の情報共有が大切で、学校と地域がつながっていることは、命がつながっていることを実感したといっています。

今、わが国は、首都直下地震や南海トラフ巨大地震、気象災害の激甚化による甚大な被害が懸念されています。子どもたちが災害から生き抜くための知恵や行動力を身に付けるとともに、その子どもたちが社会人となり、地域の防災意識の向上や安全で安心な地域づくりに関わっていくことで、世代を超えて震災の教訓が継承されていきます。私たち教育に携わる者は、必要性や意義を再認識して、防災教育に取り組んでいきたいものです。

東日本大震災から10年

— 今後の教育に求められるもの —



岩手大学教育学部教授
田代 高章

2011年3月11日の東日本大震災発生から、早くも10年となります。

この未曾有の自然災害の残した傷跡は大きく、被災地では復興もまだ途上にあります。特に、東日本大震災後に生まれ、震災を体験していない子どもたちが増えてきている現実からすれば、若い世代に過去の教訓をいかに継承し、防災・減災行動の主役として行動できる力を育成していくかは、学校や地域にとって大きな課題です。もちろん、その後も各地で起こる土砂崩れや河川氾濫を含めた台風被害や豪雨災害、火山被害等の自然災害も、全国共通の事態でもあります。さらに新型コロナウイルスの感染拡大といった新たな脅威も生じてきました。それらの状況を踏まえ、防災を含む安全教育の必要性が、あらためて認識されています。

3つの教育的価値（いきる・かかわる・そなえる）を学校教育活動全体を通して実現することとしています。その核心となるのは、震災や災害の教訓を生かし、子どもたちが多様な他者と関わりながら、自分の生き方やあり方を模索し創造すること（他者との関わりを通して自己創造）と、自分たちが生きるこれからの社会を創造していくこと（他者との関わりを通して社会創造）につながる力の育成です。

これと密接に関わる動きとして、「持続可能な開発目標」いわゆるSDGs（Sustainable Development Goals）の取り組みがあります。SDGsは、2015年9月に国連で開かれたサミットにおいて設定された、2030年までに国際社会において達成すべき共通目標です。そこでは、17の目標と169の具体目標が設定されており、貧困飢餓、国際紛争、生物多様性、気候変動など世界全体が抱える現代的課題を取り上げ、その解決をめざしています。特に、目標11「住み続けられるまちづくりを」は、社会参画の実現に関わる目標であり、震災後の未来社会を創造する主体となる子どもたちに必要不可欠な目標といえます。

SDGsは、これまで国連で提唱されてきたESD（持続可能な開発のための教育）の延長上にあります。ESDでは、子どもたちに持続可能な社会が実現できるような価値観と行動の変革をもたらすために、問題解決学習や参加型学習、批判的思考や創造的思考、主体的な行動力の育成等が教育全般において強調されてきました。

今回改訂の学習指導要領の前文においても、これらSDGsの考え方が示されています。前文では、「一人一人の児童が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。」と明記されています。まさに、教育においてSDGsの目標を実現することは、わが国の学校教育や「いわての復興教育」のめざす方向と同じであるといえます。

東日本大震災から10年を経た今日、これまでの教育遺産を継承しながら、さらにSDGsの趣旨や防災安全教育および復興教育の趣旨を実現するために、これからの学校教育で求められるのは、多様な価値観や考え方をもち人間相互が関わりながら当事者意識をもつて地域創造・社会創造に主体的に参画できる力と、何よりも地域の抱える課題を、グローバルな視点でとらえて解決し行動できる力の育成ではないでしょうか。



QRコードから岩手県教育委員会「いわての復興教育」の関連資料を読むことができます。



持続可能で「強く、しなやかな」 学校防災体制の構築に向けて



あの日から10年

東日本大震災の発生から10年目を迎える宮城県では、震災から今日までの間、再び甚大な被害を生まないようにするため、特に被害の大きかった沿岸部を中心に、学校防災体制の強化・充実に向けて、防災マニュアルの見直し、副読本を用いた防災学習の推進等を最優先に進めてきました。震災時の空気を忘れることなく、次世代にしっかりと震災の教訓が引き継がれるよう、学校関係者が一体となつて学校防災に取り組んできた日々であつたように思います。

本校の取り組み

およそ38年周期でM7.4以上の巨大地震が襲来する地震県宮城。そして、本校の学区には、これまで数々の水害の歴史を刻んできた阿武隈川が流れています。常に災害のリスクと隣り合

せの地域にあって、日頃からの備えは欠かせません。職員の大量退職といったハンディを抱えながらも、持続可能で強く、しなやかな学校防災体制を構築するために、本校では「真剣勝負なより実効的な避難訓練と、平時からの関係づくりに向けた逢隈小地域安全委員会」の開催に取り組んでいます。

(1)より実効的な避難訓練

年5回程度実施する避難訓練には、その都度「+αの想定」を入れ込むこととしています。地震・津波、水害等の地域の災害特性を考慮した基本的な想定に加え、「管理職の不在」等、日常の学校生活や災害時に起こり得る「不測の事態」を付帯します。児童の「自分の命は自分で守る力」を高めることはもちろん、教職員一人一人が「チーム逢隈」の一員として自らの役割を自覚し、専門性の高いスキルを獲得していくことをねらいとしています。

(2)地域・関係機関と連携して行う 地域安全委員会

地域や関係機関から協力をいただいで、本校の安全体制について検討する「逢隈小地域安全委員会」を避難訓練実施当日に併せて行っています。学校見守り隊、警察、役場防災部局、保護者、大学関係者、教職員等で構成する



おおくま
宮城県巨野町立逢隈小学校
校長 村岡 太



●逢隈小地域安全委員会



●避難訓練チェックリスト

この会では、まず、避難訓練チェックリスト※を用いてその日の避難訓練についての評価を行います。児童の取り組みについて、「自らの命を守るための初期対

応」や「指示の聞き方」等の観点で評価を行い、教師の取り組みについては、「避難行動への的確な声掛け」や「情報の入手・整理」「避難路の迅速な安全確認」等の観点でのチェックをします。専門性の高い委員の点検は、本校の災害対応等に関わる脆弱な部分を浮き彫りにしてくれます。

この委員会では、この評価と振り返りに加え、本校の学校安全三領域について協議するとともに、町の防災部局や警察、大学関係者からは、その折々の安全に関わる最新の情報を提供してもらっています。

報恩く未来のために

東日本大震災の発生から今日まで、本県は全国から多くの励ましと支援を頂戴しました。あの日から10年、今こうして前を向いて立っていられるのは、そのお力添えがあつたからです。今後発生が予想される南海トラフ地震、首都直下地震をはじめ大きな災害の発生に伴う学校現場の被害が少しでも軽減されるよう、本県が有する学校防災の蓄積をできる限りお伝えしたいと私たちは常々思っています。未来の命のために力を尽くすこと。それが、いただいた恩に報いることであると、生かされた私たちはあらためて心に刻み、前に進んでいきたいと考えています。

温故創新 「大熊町で学びたい、学ばせたい」 を叶える斬新な学校づくり



福島県大熊町教育委員会
教育長 木村 政文

「踏むべき土が1cmもない」
「あるべき地域がない」
「古里がない」

2011年3月、東日本大震災・東京電力福島第一原発事故により全町避難を余儀なくされた大熊町でしたが、2019年5月、避難指示が解除された大熊町大川原で役場業務が再開するとともに、200人余りの住民も大川原での生活を始めました。ただ、幼稚園・小学校・中学校は、現在も避難先の会津若松市で教育活動を行っています。再開時に700名(震災前の約47%)余りだった幼児児童生徒数は、就労、就学等の家庭の状況により急激に減少し、今年度は17名(約1.4%)です。約99%の子どもたちは、県内外の学校に、区域外就学等をして

います。
全国にも前例がない他自治体での町立の学校としての教育活動も、早10年

が過ぎようとしています。そんな中、大きな課題は、減り続ける子ども数です。(今年度は、小学校・中学校とも入学者がゼロ、中学校は2年間、新入生がいまませんでした。)このままでは、子どもがゼロの町、学校のない町になりかねません。また、区域外就学している子も、長期化した避難生活による家庭環境等の変化(就労、心身の疲労、避難先コミュニティの関係等)により、心のケアが必要な子も多く、避難先教育委員会、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーとの連携した支援が続いています。

このような状況の中、大熊の未来を担う子どもたちを育てるために、古里である大熊町での学校再開を目指すことにしました。「大熊で学んでみたい」「大熊で学ばせたい」という魅力ある学校づくりを進めることが、復興に果たす教育の役割と考えています。

そこで、特定復興再生拠点が解除さ

れる2022年の翌年、2023年4月を「教育の帰町元年」とし、復興拠点である大熊町大川原で学校(幼児、小中一体の教育施設の建設)の再開を実現すべく、今年度からさまざまな取り組みを始めました。

理念は、温故(これまで取り組んできた大熊のDNAを引き継ぐ)・創新(デジタルとアナログを生かし、多様な個に対応した個別最適な学びを保障する)です。そして、本町の教育の現状を踏まえ、「混在と多様性」をキーワードにしました。強みは、目指す教育の目標・内容にあった校舎を建設できること、さらに、校舎そのものが学びの対象になることです。

これらを具現するために、イェナプラン教育^{注1}の理念や実践方法を参考にし、校舎の設計や教育の目標・内容にも生かしています。ちなみに、設計者に言わせると、大熊の校舎は、学校らしくない学校になるとのことです。

私たちの期待通りの学校です。アナログとデジタルが混在する。さらに、多様な空間がある。多様な文化と出会う。そこには、子ども一人一人の多様な学びがある。0歳から100歳までが、一緒に学び、誰もが学び直しができる。そのような斬新で魅力ある校舎です。教育の内容では、習得(習熟)と探究の循環的な学びと未来デザインの時間(本町の総合的な学習の時間の総称)の学習に注力します。AIを活用し、一人ひとりの学習進度に応じた「教科学習の個別最適化」(デジタル)と原発事故を経験した大熊ならではの社会的な課題(経済、環境、社会)を追求する「探究学習のSTEAM化^{注2}」(アナログ)です。特に、探究学習については、SDGsの目標17項目の具現を図ります。

以上が、東日本大震災・東京電力福島第一原発事故から10年を経て、次の10年のターニングポイントである帰町元年(2023年)に、大熊町が目指す「未来の教室」です。

現在も続く避難先での教育活動、極小規模・極少人数、どれもメリットと考え、先を見通したビジョンとともにグランドデザインを示し、愚直ながらもスピード感をもち前進し続けることが、前例のない大震災・原発事故からの教育の復興とともに、町の学校存続にとって必要であると考えています。

注1…イェナプラン…ドイツのイェナ大学の教育学教授だったペーター・ペーターゼン(Peter Petersen, 1884-1952年)が1924年に同大学の実験校で創始した学校教育。

注2…STEAM化…Science(科学), Technology(技術), Engineering(工学), Mathematics(数学)を統合的に学習する「STEM教育」に、さらに Arts(リベラルアーツまたは芸術)を統合する教育手法。

全国各地のさまざまな取り組みを紹介します。

本校のミッションは「全ての人を笑顔に！」。そして、現在進行中の学びの改革のコンセプトは SEEP。S:Subject (日々の授業改善) E: EBPM (Evidence-based Policy Making エビデンスに基づく改善) E: Ed tech (教育とテクノロジーの融合) P: PBL (Project Based Learning 課題解決型学習) を柱として、持続可能な社会を創る主人公である子どもたちが、予測不可能な未来社会を笑顔でたくましく頼もしく生き抜く力が育つ学びを進めている。

本校では、一人一台端末、無線 LAN、クラウドという恵まれた ICT 環境があり、企業や大学等と連携し、最先端の学びのツールを活用したり、実証研究を進めたりしている。子どもたちにとって ICT は文房具の一つである。その環境の中で自律的学習者を育む学びとして本校が研究を進めている PBL は、生活科や総合的な学習の時間を基軸としてカリ・マネをした教科横断的な課題解決学習である。教室と社会、学びと

実社会を結びつけることを常に意識し、「リアル」「横断的」「多様性」をキーワードにフィールドワークを進めたり、トライ＆エラーを繰り返したりする中で、自己成長を促すプロジェクトベースの学びは、想定外の事柄に柔軟に対応できる力が必要とされる時代に生きる子どもたちには、必要不可欠である。PBL を通じて、子どもたちは、自己判断、自己決定、自己責任を実感する場を経験しながら、失敗を恐れずに最善を尽くす力やもっている知識やスキルを組み合わせることで納得解を生み出す力を身に付けることができるのである。本校では、この「学びの個性化」も個別最適な学びの一つと捉えている。

令和3年4月、本校は施設一体型小中一貫校「戸田東小中学校」として開校し、2,000人規模の超大規模校となる。GIGA スクール構想をベースにした「未来の教室」環境で、9年間を見通した自律的・協働的な学び「究極の小中連携教育」を実現し、全ての子どもを笑顔にしていきたい。



埼玉

グローバル社会をたくましく生き抜く力が育つ学びを目指して「令和の学び」を実現する SEEP プロジェクト

戸田市立戸田東小学校 校長 小高 美恵子



岡崎市では、令和2年度「岡崎市版 GIGA スクール構想」により、児童・生徒一人一人が確実に自分の端末を使いこなすための公教育最先端の活用環境を整備し、Society5.0 時代をたくましく生き抜く資質・能力の育成を目標に取り組んでいます。8月下旬から12月までを3期に分け、市内の児童・生徒、教職員一人一台ずつタブレットが貸与されました。そんななか、市内中学校の全生徒にはいち早くタブレットが配付され、すべての授業・領域等で活用をしています。

また、本市では児童・生徒、教職員全員に Microsoft アカウントを同時に付与し、Office365 クラウドサービスが利用できるようになっています。全教科共通して使えるスクールタクトをはじめ、各教科の特性に応じたアプリも用途に応じインストールして利用できる環境が整っています。

本校、南中学校の音楽科では、タブレットを利用して歌唱領域での合唱の授業で録音・再生機能を活用しながら、飛沫を抑えた個人追究の場

を取り入れた授業に取り組んでいます。全習から個習へと学習形態を変革しているなか、創作活動における効果的な学習の展開を考えていたところ、ヤマハ株式会社が研究開発している教育版ボーカロイドの存在を知りました。このアプリを本市の児童・生徒が利用することで創作活動における質の高い個人追究を実現できることを願い、市教育委員会に導入を働きかけ、現在市内児童・生徒すべてのタブレットにボーカロイドがインストールされています。生徒たちが授業以外の休み時間を利用して自作の曲を楽しみ、聴き合う姿を目にしています。

市内全小中学校生が一堂に会し、半世紀にわたって開催しています「岡崎のハーモニー」に代表する歌唱活動を基盤とした本市の音楽教育に創作活動が加わり、さらなる音楽教育の充実を期待しています。



右の QR コードを読み込むと本校生徒の創作曲を聴くことができます

愛知

タブレット端末を利用した、新たな創作活動の可能性を求めて

岡崎市立南中学校 校長 和田 実



愛媛

地域の期待、われらの誇り、近見中学校「空き缶アート」

今治市立近見中学校 校長 高須 昌寿

愛媛県今治市、瀬戸内海国立公園。しまなみ海道を望む近見山の中腹に近見中学校があります。校舎3階ベランダからは9,000個の「空き缶アート」が飾られています。平成6年度から続く本校のシンボル、伝統のアートです。

当初、9,000個の空き缶は、全校生徒が近見山清掃活動で拾ったものに加えて、生徒一人一人が家庭から持ち寄りました。最近では地域の方々からも「空き缶取りにおいで。」とお電話をいただくことも珍しくありません。生徒数が減少している状況では地域の協力はありがたいことです。デザインの生徒公募と選挙による選出。全校生徒参加の色塗りや紐通し。最後にベランダからの吊り下げ作業。当初は9月の運動会でお披露目としていましたが、現在は毎年1学期終業式に完成披露しています。

デザインも全校で一つのデザインから始まり、平成17年からは各学年別のデザインとなり、平成29年からは各学級ごとに学級旗のデザインになりました。目的も、近見山の環境美化を訴える啓発活動から始まり、空き缶をリサイクルして換金し、福祉施設に車いすを寄贈する福祉教育活動へと発展してきました。生徒数の減少や学校行事の精選などに伴い、目的やデザイン、回収の方法も変わってきましたが、9,000個の「空き缶アート」は27年間変わっていません。

「今年もええのができたね。」地域の方々が運動場から見上げて喜んでくれる笑顔を見て、これからもさまざまな変化に柔軟に対応しながら、地域の期待とわれわれの誇りのシンボルとして「空き缶アート」を継続してゆこうと思っています。



沖縄

コロナ禍で再考した学校の役割

八重瀬町立東風平小学校 校長 與儀 毅

今年度に入り、全国そして世界規模で拡大している新型コロナウイルス感染症のため、私たち沖縄県においても学校の休校期間が続きました。本格的に授業がスタートしたのが5月の後半で約2ヶ月遅れのスタートでした。その休校期間中に私たちの学校では、コロナ禍でもできることを教職員で話し合い準備してきました。

私たちの学校は、今年度で創立140年を迎える歴史と伝統のある学校です。その節目の年でもある今年度、学校再開を機に学校で取り組むことを、「どの教科領域も大切に」「学校生活全体を通して子どもたちを育む」としました。これは当たり前のことではありますが、原点に立ち戻り学校の役割を実践していこうということです。

具体的に取り組んでいることは、総則も含め各教科等の学習指導要領を読み込み、そこで大切にしていることに焦点化した教育実践を行うことです。その一つの方法として低学年では生活科を、3年以上は総合的な学習の時間を中核とした教科横断的な学習が取り組めるように、各学年の年間計画を学年掲示板に掲示しました。これはこれまで教師だけが年間の見通しをもっていたものを、子どもたちも一緒に見通しをもって取り組む手立てでもあります。行事も含め各教科、総合的な学習の時間の大体の見通しをもつことによって、子どもたちの主体的な

取り組みを促すものです。

その結果、私たち学校では在籍が1,000名以上いる学校で、登校しぶりの子は全校で数名はいるものの、不登校の児童がいない状態（登校復帰はしているが多少不安定の子はいる）を保っています。これは子どもたち一人一人が主体となって学校生活を楽しんでいることと評価しています。今後も地域と共に子どもたちの健やかな成長を育んでいきます。



6年生の掲示板

地球となかよし メッセージ

1,000 篇余りの応募作品をいただき、子どもたちのこの地球の「現在」についての思いの深さをひしひしと感じ取りました。詩的でリズムカルな言語表現と、色彩鮮やかで力強い造形表現が際立ってきたようです。ただ、私の心、感じ方をもっと大胆に表現してほしいと願っています。 評：審査委員長 児島邦宏

◎後援／環境省、日本環境教育学会、日本環境協会、全国小中学校環境教育研究会、毎日新聞社、毎日小学生新聞

学校賞：福岡県 大牟田市立大正小学校

入賞作品発表

Native Costume

さかた みずき
坂田 瑞希 兵庫県 神戸龍谷中学校 2年

私は世界中の人々が世界中の民族衣装を着てみるべきだと思う。民族衣装にはその国の宗教や歴史、自然や文化が色濃く反映されている。だから民族衣装を着てみた人々は、衣装の色やデザインを見てそれらを感じ取ることができるはずだ。それらを感じ取れたなら、その国の人々の気持ちになって物事を考えることができると思う。

ではなぜ、その国の人々の気持ちになって物事を考える必要があるのか。それは、人類が昔から絶えず他国をののしたり、脅し合ったり、戦争をしてきたからだ。今もそれが続いていることを私は悲しく思っている。相手の国の文化や考え方を否定することを、もう二度としてほしくない。だから民族衣装を着てみるべきだと思った。



評 民族衣装の衣のしたの小宇宙をお互いに感じ取り、グローバルな世界、大宇宙を共有しようというその発想に感動、感服しました。



わたしのおばあちゃんはいにちしょうで足も動かかせません。家族といっしょにいると元気がしますが、1人でいると少しさみしそうな顔をしています。でも、さんぽに行くともっと元気になるます。だから、たくさんさんぽしていっぱい思い出を作ろうと思います。

おばあちゃんと散歩の思い出

たかやま あずき
高山 梓希 千葉県 市川市立大柏小学校 5年

わたしのおばあちゃんは、にんちしょうで足も動かかせません。家族といっしょにいると元気がですが、1人でいると少しさみしそうな顔をしています。でも、さんぽに行くともっと元気になるます。だから、たくさんさんぽしていっぱい思い出を作ろうと思います。

評 みんなが笑顔のあなたの絵、猫も、鳥も、花までも笑顔です。その真ん中のおばあちゃんの穏やかなほほ笑み、幸せそのものです。



川

にしむら だいし
西村 大志 埼玉県 富士見市立水谷小学校 4年



ぼくは、やなせ川でとったアユと、おじいちゃんがいる高知の川で手長エビをとって食べてみました。やなせ川でとったアユは、土のおいがしてあまりおいしくなかったの、やなせ川の水は高知の川とくらべるとあまりきれいでないことがわかりました。高知でとった手長エビは土のおいが全くしなかったのとてもおいしかったです。

地球には、きれいな川や、よごれた川などいろいろな川があります。どの川も人間が、よごしたり、きれいにしたりしているので、みんながきょう力すれば、高知の川のようなきれいな川になると思います。

「地球君、もう少し時間がかかるけどぼく達が大きくなるまでには、きれいな川にするからね。」

【評】二つの川の生き物の味を比べて、川の汚れ具合を調べる体当たりの迫り方がすごい。汚れた川の魚の悲鳴が聞こえる。きれいにする！



いってらっしゃい あげはちょう

みやなが ひなた
宮永 陽太 東京都 中央区立久松小学校 1年

ぼくがつかまえた、アゲハのようちゅうが、はっぱをモリモリたべてさなぎになった。

がっこうへいっているあいだにちょうになった。

そらがひろくて、みどりがたくさんあるところへ、とんでいってね。

またかえってこられるように、しぜんをたいせつにするね。

【評】真つ青な天空に、羽をいっぱい広げ、喜びあふれ舞い上がるあげはちょう。命の歌が聞こえてくる。この豊かな自然をいつまでも。

みんな友だち

もり ゆいか
森 悠唯花 海外 香港日本人学校大埔校 1年



わたしは赤ちゃんのときから香港にすんでいるので、わたしのようちえんにもたくさんの国の子どもがいました。

みんな肌の色もかみの毛の色もお母さんと話すときのことばもちがう。

でもようちえんに入った2才のときは、英語も話せないし日本語だって上手じゃなかったけど、ことばができなくてもすぐにいろいろな国の友だちがたくさんできたよ。すこし英語が話せるようになったら、もっと友だちができたよ。

せかいのみんながともだちになってみんながHappyになればいいな。



【評】まあるい地球のまあるい仲間。生まれたときから、みんなそれぞれ違っているけれど、思っているのはみな同じ。Happy なともだち。



針子

こいけ ゆずか
小池 柚香 東京都 立川市立第七小学校 5年

わたしは今、学校でもらったメダカを大切に飼っています。最初はたまごをもらって家で針子（メダカの赤ちゃん）が生まれ、一生けん命お世話しました。でも針子は全滅してしまいました。たぶん水のかえすぎが原因だと思います。

少したってから、今度は、大人のヒメダカをペアでもらいました。ぜったい死なせないように水かえは週に1回～2回程度にし、毎日朝と昼にエサをあげています。今は、たまごを10コくらい産んでくれます。もう30匹以上生まれています。ちょっとしたブリーダーみたいです。

最近、メダカがぜつ減きぐ種だと知り、大切に育てて守ってあげなきゃと思ってきました。針子たちが大人になるのが楽しみです。

【評】あなたはメダカのお母さん。針子を見つめ、見守り、育て上げ、ぜつめつきく種を守ってきました。あなたはいのちのお母さん。

入賞作品

沖縄のみりよく すてき！

なかむら 仲村 さや 沙綾 沖縄県 南城市立大里南小学校 3年



沖縄へ来たりよこうの人や、しゅっちょうで来た人に、ただ見たりかんこうしたりするんじゃなくて、沖縄のいいところを見つけてほしい！「すてき」と言ってもらいたい。

わたしたちが、来た人に、教えてあげたい。そういう思いでかきました。

入賞作品

虫たちがあつまる大きな木

とみや 富谷 さえ 紗英 海外 シカゴ双葉会日本語学校全日校 2年



いつからいるの？ せが高いね
 キリンさんがかた車してるみたい
 もりもりそだって
 はっぱがゆらゆらゆれてるね
 さわってみたら ぼこぼこざらざら
 のぼってみたら グラグラしてる
 ここからみると ぜんぶみどりだよ
 青空もよく見える
 えだの先がによろよろしてておもしろいな
 もしかしてりんごの木？
 木の下に行くと すずしくて気持ちがいいよ

くものすもあるし、アリさんやほかの虫たちもきているよ

虫たちも木の上で たのしくすごしているのかな

いつもわたしをまわってしてくれる木

見るとうれしくなるよ

これからもずっとここにいてくれるといいな

入賞作品

お月さま

いずみ 和泉 ことこ 琴胡 東京都 中央区立久松小学校 3年



ちぎゅうのみんな
 おやすみなさい

※事務局註
 スクラッチによって描かれた作品です。

入賞作品

団結湖公園で太きょくけん

むかわ 武川 ひろみ 博美 海外 北京日本人学校 3年



わたしは、週末にお父さん、お母さんと一しょに団結湖公園で、中国人のチームに入って太きょくけんを習っています。やなぎと池がきれいな公園です。

練習は養生功からはじまります。ストレッチ運動です。どこからともなく沢山の人が集まってきます。

つづいて太きょくけんです。いくつかのかたがあって、短いから長くてむずかしいものまで、みんなじゅん番にこなしていきます。

わたしは八法五歩という一番短いのを習っています。手足の動きとリズムがむずかしいですが、親切に教えてもらえます。上手になったら赤いせんすを使うのをやりたいです。

朝早くから、北京の人たちと一しょに体を動かすのはとても気持ちがいいです。



◎審査委員(敬称略)

児島 邦宏 東京学芸大学名誉教授

角屋 重樹 日本体育大学教授

須田 祐美 環境省大臣官房総合政策課環境教育推進室

加藤 超大 日本環境教育学会理事

日本環境教育フォーラム

藤森 克彦

大谷麻由美

伊東 千尋

全国小中学校環境教育研究会会長

東京都品川区立大井第一小学校長

毎日新聞社ビジネス開発本部教育事業室

教育出版 代表取締役社長

入賞作品 ぼくたちだけじゃだめなんだ

こうち としる 福岡県 大牟田市立吉野小学校 4年

ぼくがこのポスターをかけたわけは、この前テレビで毎日何も食べられずきたない水しかのめない、ぼくと同じ年れいの子を見たからです。



わかいのに働いて、ぼくたちがポイすてをしたり、ゴミをだすことによって苦しんだり、命をおとしたりする人たちがいるということを知っていますか？

だからぼくはみなさんにも、SDGsをすすんでやったり、なるべくゴミをださない、ポイすてをしたりしないということを知ってほしくてこのポスターをかきました。

そして、ぼくは地球もかなしんでいるんじゃないかなあと思いました。

ぼく自身もこのポスターをかいたあとにふりかえてみると、ポイすてなどをしていたので、気をつけたいです。

入賞作品

共存

さかもと たくみ 東京都 中央区久松小学校 4年



これは僕がアメリカの博物館で見学した時に撮った写真で、「Fear」（＝恐怖）と書かれた作品を消しゴムで消していく参加型アートだった。

僕たち人類はたくさんの恐怖を感じながら生きている。未知への恐怖、死への恐怖、そして変化への恐怖。最近のコロナウイルスが、今まで以上に人類に恐怖を与えている。

インターネット上で、コロナウイルスは人類という地球にとってのウイルスを退治するために投入されたワクチンだ、という話が話題になっている。

確かに、人間は、生きているだけで地球の環境を破壊しているのかもしれない。

でも、ずっと恐怖の中で暮らしていくのが嫌だ！ 地球となかよく暮らしていきたい！

今までの生き方を変えるべきだと思った。

入賞作品

命を運ぶゆうびん屋

あまの みう 千葉県 市川市立大柏小学校 5年



世界のゆうびん屋

世界にはいろんな命をとどけるゆうびん屋がいるんだよ。とどけてもらって命がめばえ、あたらしい命を作るんだ。自然にはこんでもらってる。生き物にはこんでもらってる。いろんな命をはこんでる。世界のゆうびん屋 人間だって1つの命 なにかにはこんでもらってる。

入賞作品

戦争って何だろう

まつまる みれい 千葉県 市川市立大柏小学校 5年



戦争とは何だろう。領土の広げ合い？ 自分が楽しむため？ 昔はそうだったのかもしれない。しかし、今の戦争は、私が考えるには、「だれも得をしない、たくさんの命と思い出を壊すだけのもの」だと思う。人の作った命、物、自然が作った植物、土地、その全てを戦争は壊す。

そして、それは元にもどるには、長い年月が必要になる。戦争をした国がどうなろうと、された国がどうなろうと、思い出は消える。自然は長く姿を消す。人の歩んだ道は途絶える。だけど、我々が戦争に対して意識を変えれば、世界の人が、戦争について深く考えれば、失う物も少しずつ減っていくのかもしれない。

入賞作品

未来の為に、今から始める

こばやし あずさ 海外 中部テネシー日本語補習校 中学3年



私たち人間は長い年月をかけて、たくさんの二酸化炭素を排出してきました。

地球温暖化が進み、今では地球上の動植物に多大な影響が及んでいるのが、目に見える程になってしまいました。

そこで、長い年月をかけてでも、二酸化炭素の排出量を減らしていくべきではないでしょうか。

ちょっとした心がけで、明日すぐに環境が改善される訳ではありませんが、十年後、百年後の地球が喜ぶのは確かです。

今日から始めましょう。未来を生きる誰かの為に。

入賞作品

究極のエコキャップ使用法

ちよもり おうが 愛知県 知多市立八幡中学校 2年



僕はリサイクル活動に関心をもっています。日ごろ僕たちが飲んでいるペットボトルやエコキャップを自分の生活の中でいかすことはできないだろうかと考え、エコキャップカレンダーを作製しました。

万年カレンダーなので、永遠に使い続けられるのがこの作品の売りです。

親と子どもが楽しむ美術館① 子どもたちの詩集づくりから始まった お菓子屋さんの文化活動

六花亭製菓株式会社「中札内美術村」「六花の森」

館長 飯田郷介



▲『サイロ』創刊号からの表紙が一面に貼られた「サイロ歴史館」

いお菓子に
出会って味
わった幸福
感とは同じ
もの」とい
う企業理念
に基づいて
います。
地域に根
差したお菓
子を作り続

北海道で「中札内美術村」「六花の森」（北海道中札内村）などの美術館やギャラリーを展開している六花亭製菓株式会社（1933年創業、1977年現社名に変更）は、北海道土産としての「マルセイバターサンド」などで広く親しまれていますが、1968年に日本で初めてホワイトチョコレートを商品化した会社でもあります。また「お菓子は文化のバロメーター」という言葉に支えられ、酪農王国といわれる十勝の牛乳、小豆などのふるさとの原料をふんだんに使い、商品にはふるさとの歴史や風土を盛り込んだ名前をつけるなど、地域の歴史や文化に根差したお菓子を作り続けています。こうしたお菓子は、北海道内では販売されていません。これは無理な規模拡大は必ず商品の質を落とすという考えからきています。六花亭製菓の文化活動は、「名曲を聴いたり、名画を見たりして、よかったなあと酔いしれる気持ちと、美味し

「坂本直行記念館」など、7館の美術館が展開しています。『サイロ』の600号までの表紙が飾られた「サイロ歴史館」では、子どもたちのほほえましい詩も紹介され、それらの詩をつくった子どもたちが親となり、子どもや孫を連れて訪れています。
美術館を訪れた親子は、帰りの道すがら、あるいは帰宅してから美術館の話題で花が咲くことでしょう。親子の共通の体験は会話を生み出し、話は広がっていくと思います。子どもたちへの美術教育は12才くらいまでが望

ける傍ら、地域文化への貢献活動が続けていますが、これらの文化活動は、地域の子どもの詩集づくりから始まりました。六花亭製菓を創業した小田豊四郎が、「十勝の子どもたちの詩集をつくりたい」と地元の先生方に持ちかけ、お金は出しますが、企業の名前も口も出しませんと児童詩誌『サイロ』を1960年より月刊誌として発行を始めました。また小田豊四郎は『サイロ』の表紙絵を地元の開拓農民で、十勝の風景や山野草を描いていた坂本直行に依頼したところ、「子どもたちのためであれば無償でやりましょう。そして死ぬまで描きましよう」と快諾され、その言葉通り彼は死の直前まで描き続けました。

600館以上の美術館・博物館を見てきました。そして長年美術館づくりに関わり、多くの人々と出会う機会を得て現在、美術館の館長となりました。次号から、親と子どもが楽しむ美術館について考えていきたいと思います。



▲緑と山野草に囲まれた「六花の森」

飯田郷介 (Kyoukei Iida)
六花亭製菓株式会社「中札内美術村」「六花の森」館長
1973年早稲田大学理工学部建築学科卒業、株式会社大林組入社、建築設計部門を経て、企画提案部門でプロボイザル、プレゼンテーション、プロデュース業務を担当し、六花亭製菓株式会社の菓子工場、店舗、美術館、音楽ホール、鈴鹿かまぼこ株式会社（神奈川県小田原市）の店舗、文化施設、玉村豊雄ライフ・アート・ミュージアム（神奈川県箱根町）など商業施設、文化施設の企画・設計・プロデュースに携わる。著書に「美味しい美術館」「美味しい美術館PARTII」。

2013年より現職。



愛知教育大学教授
鈴木 健二

「15分でできる 小さな道德 教材集」を 活用しよう！

「小さな道德授業」をやってみよう！

「小さな道德授業」は、よい素材さえ発見できれば、誰でも開発することができる。しかし、「素材を発見することが難しい」と思っている教師も多いだろう。

そこで、まずお勧めしたいのが、すでに開発された「小さな道德授業」プランを活用して授業を試みるということである。実際にやってみることで、**「小さな道德授業」の手応えを感じたり、素材発見のコツや授業づくりのポイントが見えてくるようになる。**

誰でも簡単に活用できるように、「15分でできる 小さな道德 教材集（サンプル版）」が開設されているので、ぜひアクセスしてほしい（下記参照）。

多様な活用ができる

「小さな道德授業」は、5分～15分くらいで実施できるので、さまざまな活用の工夫が可能である。例えば、次のような活用である。

- ①朝の会などのちょっとした時間に活用し、子どもたちの規範意識等を向上させる。
- ②一時間の道德授業の導入や終末で、教科書教材と関連付けて活用する。
- ③行事などの事前指導で活用し、取り組む意識を高める。

教科書教材と関連づける

教材集から「小さな道德授業」の活用例を示してみよう。

「あたりまエコ」というポスターを活用したプランである（中学校向けであるが小学校でも実践可能）。

ポスターには日常のエコがイラストで9つ示され、次の言葉がある。

意識しなくても自然にできる。エコを当たり前にする時代になりました。

このプランは、例えば「変わりゆく地球」という教科書教材（『中学道德3とびだそう未来へ』教育出版）と関連づけて活用することができる。

「変わりゆく地球」では、地球環境の悪化を写真をもとに訴え、次の課題が投げかけられている。

私たちは地球とどんなふうにつき合い、どんな地球にしていけばよいのか、考えてみましょう。

授業の終末で地球とのつき合い方を考えさせるときに、「あたりまエコ」のプランを活用することによって、身近なところから地球とのつき合い方を考えるヒントをとらえさせることができる。

教材集サイトには、このほかにも多くのプランが教材・発問・留意点などとともに示され、テレビモニターなどに映してそのまま授業できるようになっている。「小さな道德授業」の手応えを感じていただければと思う。

「15分でできる 小さな道德 教材集（サンプル版）」のお知らせ

道德の授業はもちろん、朝の会、帰りの会、学年集会、全校朝会、学校行事などさまざまな場面で活用できる「小さな道德」の教材集を公開しています。「きこえる幸せ」「ほめる力」「伸びない人は、いない」など、子どもたちの身近な素材を活用した授業プランを掲載しており、「小さな道德」にすぐに取り組むことができます。

小さな道德 教育出版 検索 https://ssl.kwc.co.jp/ks_dotoku/



ID:guest PASS:guest

消えゆく日本庭園を守りたい —日本文化の粋を世界に発信—

ほ・つ・と・な・出・会・い

庭師 村雨 辰剛さん



家族も先生も日本行きを後押し

日本に興味をもったのは中学生の頃、歴史の授業で日本の戦国時代にふれたのがきっかけです。敵將に塩を送るエピソードなど、戦国武将のありように魅了されました。僕の生まれたスウェーデンは自由主義な国なので、子どもが夢や目標をもっているとみんなが応援してくれます。日本に行きたいと先生方に話すときもみなすごく協力してくれて、日本にホームステイしている間でも通信教育で課題を提出できるよう、学校側が環境を整えてくれました。そういう制度はそれまでなかったのですが、僕のやる気を見て柔軟に対応し、卒業できるよう配慮してくれたのです。教育環境や制度にすごく柔軟性があるのは日本の大きな違いだと思います。

徒弟制度の意義

18歳で日本に移り住んで、しばらく語学講師などをしていましたが、もっと日本の伝統文化に関わる仕事がしたいと考えていたときに造園業のアルバイト募集広告が目にとまりました。やってみたいと思うくらいに合って、庭師を一生の仕事にしたいと思い、師匠になってく

れる人を探して弟子入りました。それから約5年間、親方のもとで日本の植木技術を学んだのですが、僕にとって徒弟制度はとても合理的でした。というのも、庭師の仕事には美意識が大変重要で、それを養うには親方と共に生活し、その美学や感性を直に見ることによってしか学べないことが多いからです。侘び寂びとはこういうものだとか教科書を読んで身につくものではない。効率的に親方の技術を吸収し、感性や忍耐力まで養うことができるという意味で、美に特化した庭師の仕事に徒弟制度は不可欠だと思います。

知識があればアピールできない

国際化が進む中で日本の良さをどう世界にアピールすべきがよく問われるのですが、それ以前にそもそも日本に対する知識がどれだけあるのか、日本を本当に理解できているのか、疑問に感じます。16歳で初来日した際、好奇心のおもむくまま「これは何？ 何のためにあるの？」と周囲の人にあれこれ聞いたのですが、「わからない」と返ってくるものが多くて、日本人自身が日本文化について話せない。なぜ神社に鳥居があるのか、なぜしめ縄を張るのかなど、自分たちにとっては当たり前にすぎることすらなくても、外国からみれば独自のユニークな文化です。

年末は庭師が最も忙しい時期なのですが、それは綺麗な気持ちで新しい年を迎えたい方が多いからで、精神的な部分からも日本を感じます。でも残念なことに、そういう日本らしさってどんどん減っていくんです。

室町、安土桃山時代にできた日本特有の

美はすごく奥が深い。日本文化への知識や造詣があれば、たとえアピールの仕方が下手であつても何かを伝えられるはず。自分たちの文化がどういったものなのか、まず見直すところから始めてみてはいかがでしょうか。

不退職の決意で挑戦を続ける

僕は人生の早い段階で夢中になれるものがなかったのも、恵まれていると思います。しかしそれでも必死になって探し続けたから。「自分は何をやりたいか、何が好きかわからない」とよく相談されますが、何をするか悩む自体、時間がもったいないので、とりあえず行動を起こしてみています。今までいろいろなラーメンを食べてきた経験があるからこそ、中でも塩味が好きだとわかる。ラーメンを食べたこともないのではお話にならないでしょう。好きになれるかわからなくても、いろいろなことに積極的に飛び込んでみた方がいいと思います。

日本から和風庭園がなくなっていくのが悲しくて、何とかそれを食い止めるために多くの方に興味をもってもらおうと、SNSやYouTubeで活動を発信しています。今後やってみたいことも沢山あるので、僕の好きな日本語、「不退職」の決意で挑戦を続けていきます。

村雨辰剛（むらさめ たつまさ）

1988年スウェーデン生まれ。18歳で日本に移住後、23歳で造園業にとびこみ、見習い庭師となる。26歳で日本国籍を取得し、村雨辰剛に改名。造園業の傍らタレントとしても活動し、2018年のNHK「みんなが筋肉体操」出演は大きな話題に。日本語、スウェーデン語、英語を話すバイリンガル。著書に『僕は庭師になった』（クレーン）がある。

Educo Salon

前号について寄せられたご感想です。

- ◆巻頭インタビュー。吉野彰先生の温かい人柄、豊かな知見が、平易で率直なお言葉から伝わり感動しました。（青森県 S.K）
- ◆守屋一幸氏の「オンライン授業とこれからの学校教育」を拝読し、従来の授業の課題を改めて認識しました。個別最適化された学びの実現は喫緊の課題であると実感すると同時に、新しい授業のあり方への期待もふくらみました。（愛知県 T.S）
- ◆緊急企画「コロナの教訓」は、ぜひメジャー報道したうえで、文科省にも届けたいような内容です。ぜひ、声を大にして「ポストコロナ教育」を目指しましょう。（高知県 E.M）
- ◆地球となかよしゼミナールで私自身の「心のバリア」が外れました。その結果、他の分野にもさまざまな「心のバリア」があるのではないかと考えるようになりました。（京都府 Y.T）

なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進展や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命のびのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていくとする優しく大きな心をもつことが求められています。わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。

教育出版は持続可能な開発目標（SDGs）を支援しています